

輪郭打破—あなたはどこにいるのか—

講演	中村 信博【なかむら・のぶひろ】
講師紹介	同志社女子大学学芸部長・教授

いまご紹介をいただきました同志社女子大学学芸学部の中村信博です。2017年度春学期の同志社スピリット・ウィークにお招きをいただきまして、ありがとうございます。今日は三木先生クラスの授業の一部であると同っています。同志社建学の精神に関連してお話をということですから、通常の授業のようにというよりも、同志社で学んだ私自身の学生時代や、その後、教員として多くの学生さんたちと一緒に学んできた体験なども含めて、お話ししてみたいとおもいます。一貫したまとまりのあるお話というよりも、さまざまなことを申しあげることになるかとおもいます。全体として理解していただければ幸いです。

輪郭打破

はじめに、本日テーマとして掲げました「輪郭打破」という言葉についてお話しします。

この言葉は、私が同志社大学の神学部を卒業して、教会の牧師としての資格を得るまで、その間、伝道師という立場でありましたけれども、そして正式に牧師になってからの期間も含めて数年間を過ごした東京の霊南坂教会の玄関、受付の真上に掲げられた扁額に書かれていた言葉です。それは、教会の創立者小崎弘道牧師の揮毫によるものでした。

小崎弘道

一熊本、同志社、東京

小崎は同志社第一回の卒業生のひとりですが、いま申しました霊南坂教会を設立し、しばらく、7年ほどの間ですが、新島襄亡きあとの同志社第二代の社長としてその責任を負うことになりました。小崎はそのとき、まだ34歳でありました。熊本県の出身で熊本藩がアメリカからリロイ・ランシング・ジェーンズ (Leroy Lansing Janes) を破格の待遇で教師として招いて開校した、当時最先端の熊本洋学校に学んだ秀才でした。

ジェーンズは南北戦争のときに北軍に属して戦った軍人でしたが、敬虔なクリスチャンでもありました。熊本洋学校では、全教科をひとりで教えただけでなく、しばらくしてからは、生徒たちを相手に自宅で聖書の講義もはじめています。このときのジェーンズの自宅は熊本県最初の洋風建築として知られ、県の重要文化財でありました。が、残念なことに、昨年4月16日の熊本地震によって倒壊したことは大きなニュースになりました。学問、教養、人格、とりわけキリスト教信仰において、ジェーンズの大きな影響を受けた若い生徒たちは、自らキリスト教への入信を誓約する文書を書き上げ、各自血判について、その生涯を神にささげて生きることを誓います。その誓約書は「奉教趣意書」と呼ばれ、1876年1月30日に郊外の花岡山で35名の生徒たちが署名をいたしました。

世にいう「花岡山事件」です。この事件の影響は大きなものでありました。ジェーンズは解任され、熊本洋学校は閉鎖されてしまったからです。学校はなくなってしまったのですが、と同時に、堅い誓約によって結ばれた若いキリスト者の集団が熊本に生まれることになりました。この集団は歴史においてしばしば「熊本バンド」と呼ばれてきました。ひょっとすると耳慣れないタームかもしれません。この場合、バンドとは集団で音楽活動をする人びとを指しているのではなく、特定の活動をする集団という広い意味で使われています。とくに、明治期には各地にキリスト教信仰によって結束を誓った人びとが出てきます。そういう使われ方をしたバンドの中に、横浜バンド、札幌バンドがあります。あるいは静岡バンドの存在を指摘するひともあります。

小崎は最年少でこの熊本バンドの一員になりました。そして、多くの熊本バンドの仲間たちとともに、洋学校が閉鎖されたその年に同志社に転校してきたのです。同志社英学校は開校してまだ2年目の何もかもこれからといった文字通り誕生したばかりの学校でした。転校生たちは熊本洋学校で、すでに高いレベルの教育を受けていましたから、よちよち歩きの同志社の教育にはとても不満であったようです。

彼らが新島や宣教師たちを悩ませ、苦勞させたことは、2013年に放送されたNHK大河ドラマ「八重の桜」でも丁寧に描かれていました。ご覧になった方、ご記憶の方もおありになるかおもいます。彼らはとびきりのエリート集団でありながら、教師の思い通りにはならない、いわば教師の手を焼かせる生徒たちでした。

1879 (明治12) 年、小崎は自身も含めて15人の仲間たちとともに同志社最初の卒業生となりました。そして、その同じ年、東京に出ます。そして、関西から上京した11人のクリスチャンの仲間たちとともに「群羊社」という結社を設立したのです。その中には熊本バンドの仲間であり、同志社最初の卒業生のひとりでもあった岡田松生がいました。岡田は、上京して津田仙が経営していた学農社という学校の教師となったひとです。津田仙はのちに青山学院の創立者のひとりとなり、また、津田塾大学の創立者津田梅子は彼の娘でした。津田が設立し、岡田が教えていた銀座の学農社の一角を借りるようにして、群羊社の仲間たちはひとつの教会を創立いたしました。当時、新肴町教会と呼ばれましたが、それがのちに港区赤坂に移転をして、現在までつづく霊南坂教会となったのです。

私がその教会におりましたのは、ちょうど小崎が在任中に建築された当時の礼拝堂を取り壊して、新しい礼拝堂を建築しようとしていた時期と重なります。その頃の赤煉瓦スタイルで、古色蒼然とした重厚な佇まいは、そのまま同志社の今出川キャンパスにあってもおかしくない雰囲気でした。港区の都心にあって周囲の緑とも美しく調和した景観は、多くのひとに愛されていたことを記憶しています。

ちなみに、設計は数年前 (2012年) に創建時の姿に復原された東京駅舎の設計で名高い辰野金吾によるものでした。その頃の霊南坂教会は辰野晩年の作品として知られ、辰野にとっては唯一の教会建築となるものでした。辰野は東京帝国大学教授として多くの後進を育てますが、その中のひとりには、その後おもに関西方面で活躍し、同志社女子大学の栄光館やジェームズ館、京都大学時計台を設計した武田五一がいます。こうして、日本近代建築の系譜をなぞってみれば、同志社とも不思議な線で結ばれているのかもしれません。

観念の輪郭

当時、同志社を卒業したばかりの私は、まるで同志社の東京キャンパスかとおもわれるような印象の教会で、毎日小崎の「輪郭打破」という扁額を見あげて過ごすことになりました。それは、小崎が牧師として、またひとりの信仰者として大切に、折りに触れて教会の信者の方たちに語りつけてきた大切な言葉であったかおもいます。私は、いかめしい印象が残るこの言葉に次第に慣れるというよりも、この「輪郭打破」という言葉に見張られているといいますが、あるいはこの言葉に包まれて過ごしたといった方が正確かもしれません。そんな気持ちになって過ごした数年間でした。「輪郭打破」は小崎が扁額に掲げた言葉でありましたが、いつか、私の心の深いところに落ち着いて、まるで私自身に自戒を迫る言葉のようになっていました。

「輪郭打破」、それはものごとの概観、形式、あるいは枠組み、見た感じやイメージ、そういうものに表象化されたものを、あたかも変更不可能な固定的なものとしてしまうことを打破する、打破するという戒めの意味で使われている言葉です。ですから、本来「輪郭」とは外形や外側に表出した形という意味ですが、打ち破らなければならないのは、むしろ、それを固定的なものに思い込んでしまっている私たちの心や固定観念にあるというべきなのかもしれません。

偶像不羈 (てきとうふき) に生きる

ところで、小崎は自ら設立した教会になぜこの言葉を掲げたのでしょうか。その明確な理由を推し量ることのできる記録を私は知りません。そこで今日は私の推測を申しあげたいとおもいます。

小崎弘道は明治から昭和初期を生きた、文字通り日本を代表するキリスト者であり、牧師であり、また思想家でありました。が、東京に仲間たちと教会を設立した当初は、随分と苦しい生活を強いられました。明治新政府によって切支丹禁制の高札が撤去されたのは1873 (明治6) 年のことでした。同志社の設立はそのわずか2年後、小崎が同志社を卒業して東京で牧師になってからでも高札の撤去から、たかだか6年後のことであったことをおもえば当然のことかもしれません。キリスト教も教会もまだ数え切れない誤解と無理解の中にあつたからです。小崎は翻訳や執筆、また講演などによって生活の不足を補ったようです。「Young Man」を「青年」と訳し、「Home」に「家庭」の訳語を充てたのも小崎であったと伝えられています。また、若くして同志社の責任を負うことになった小崎は理想も高く、校長時代にもアメリカからの宣教師たちとの確執や同志社の経営のことで、多くの悩みと苦勞を抱えていました。

ようやく小崎らしい本領を発揮し始めたのは、再び東京に戻って、自らの設立になる霊南坂教会の牧師に専念し、一方で、キリスト教関係の多くの団体に指導者のひとりとしてかわるようになってからかもしれません。小崎が東京に教会を設立して10年ほど経過した1890 (明治23) 年1月21日朝のことでした。神奈川県大磯の百足屋という旅館で療養中の新島襄は、同志社に宛てた遺言をすることになります。新島は、前年からの関東方面での大学設立運動や募金活動の疲れが蓄積して、京都に帰ることなく療養を余儀なくされていました。八重夫人は新島の危篤を知って急遽京都から駆けつけました。新島の口述を書き留めたのは新島の信頼篤い教え子徳富蘇峰でした。弟は日本のトルストイとも呼ばれた作家の徳富蘆花でありました。この兄弟はふたりとも小崎と同じように熊本から同志社に学び、新島に大きな影響を受けました。兄蘇峰は明治から昭和にかけて言論人、ジャーナリストとして振幅の大きな活躍をしたことで知られています。このとき小崎は、この遺言の口述筆記という厳肅な瞬間に立ち会うことになったのでした。

今日は、同志社に宛てて残された十ヶ条の遺言のすべてについては申しあげる余裕はありませんが、小崎の「輪郭打破」に関連して第四条となる遺言についてだけは触れておきたいと

おもいます。そこには、

「同志社二於て八偶儻不羈なる書生ヲ庄束せす務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導す可きし以て天下の人物ヲ養成す可き事」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』4 同朋舎出版 1989年 403頁）とあります。

難しい言葉遣いですが、『現代語で読む新島襄』（『現代語で読む新島襄』編集委員会編 丸善 2000年 253頁）では、

「同志社では偶儻不羈（てきとうふき）なる書生〔信念と独立心に富み、才気があって常規では律しがたい学生〕を圧迫しないで、できるだけ彼らの本性にしたがって個性を伸ばすようにして天下の人物を養成すること」

と、分かり易い言葉に置き換えられています。同志社教育の理念を端的に表しているとして、同志社では大切にされている創立者の遺言です。偶数年度の同志社スピリット・ウィークの講演集にも、たしか「偶儻不羈なる書生ヲ庄束せす」というこの時の遺言の言葉をそのままタイトルとして用いておられることとおもいます。

小玩器の製造場とならざるよう

新島は学生たちを規格品のように育てることを極端に嫌った教育者でした。新島の理想は、伸びやかで自由な思考ができる人物を育てることにありました。同志社の教育にかかわる者は、その個性豊かな学生に圧力をかけ、また拘束してはならない。それが新島の願いでありました。

この新島の理想に関連しているとおもわれるのですが、新島はこの遺言の3カ月ほど前、ちょうど関東での大学設立運動と募金活動のさなかに、同志社の学生であった横田安止に宛てて書いた手紙の中で、

「我が同志社をもって将来、小玩器の製造場とならざるよう、生徒諸士にも精々（せいぜい）ご注意これ有りたく候。これ小生の日夜、我が邦家のために祈りて止まざるところなり」（「85 横田安止宛 一八八九（明治22）年10月25日」同志社編『新島襄の手紙』岩波書店 2005年 294頁。以下、『新島襄の手紙』294）と書き送っているのです。同志社は小さな、そしてどれもおなじ仕様のおもちゃを製造する工場になってはいけない、そうならないように学生である君たちも互いに注意して欲しい、私は同志社の教育のあり方がこの国をも変えていくことを信じて、毎朝毎晩祈りつづけていますよ、というのです。

小崎の回想

新島が亡くなったのは、遺言の日から2日後のことでした。私は小崎の「輪郭打破」は新島の遺言を焼き直したものではないかと考えてみたいとおもいます。それが、私の推測です。

その理由は二つあります。一つは、当然のことですが、同志社で新島に育てられた自らの学生時代そのものが偶儻不羈なものであったのではないか、という小崎自身の回顧の気持ちを推測してみるので。熊本からやってきた血気盛んな若者として、他の熊本バンドの仲間たちとおなじように小崎は必ずしも従順な学生であったわけではありませんでした。むしろ、自分たちよりも先に入学しながら、懸命に学ぼうとしない先輩たちと、その意欲のない学生たちに迎合するような授業をしていた教師たちにも厳しい批判と激しい不満をぶつけていました。不満と批判は校長であった新島にも向けられるのですが、しかし、新島はその憤懣を抑圧し、矯正しようとはしませんでした。

新島はむしろそれを成長へと仕向けるように小崎と仲間たちを育てたのです。そして、多くの方が推測しておられるように、熊本バンドの青年たちの一途とおもえる情熱と探究心が、その後の同志社の骨格と校風をつくっていくことになりました。新島は彼らの力を借りながら、彼の理想とする学校に近づけていくのです。

そして二つ目の理由ですが、小崎の性格というよりも彼自身の人生そのものが関係します。幕藩体制の崩壊期に武士の家庭に生まれ、儒教的な教養の中に育った小崎にとって、キリスト教の牧師として新しい日本社会の建設という生涯の大事業こそ、まさに偶儻不羈そのものを体現したような人生であったはずでした。小崎の人生は新島に学んだ同志社での学生時代だけではなく、その人生のいわばすべてをかけて常に自分の人生や思想を組み替えることによってだけ貫き通すことができた人生であったのかもしれないのです。

小崎は、新しい時代をたえず固定化しがちな自分自身の精神のあり方をも含めて、若い日に出合ったキリスト教の考え方によって、打ち破りつづけようとしたのではなかったでしょうか。偶儻不羈はけっして新島だけが使い、新島だけが好んだ言葉ではありません。明治期の覇気ある青年たちの理想として多くの知識人が理想とした言葉でもありました。小崎は、その近代日本の理想としての青年期を形容する偶儻不羈をあえて使わずに、自らを戒めつづけるためにも「輪郭打破」という言葉に置き換えたのではなかったかとおもうのです。

もうひとりの輪郭打破 一新島八重の場合――

そして、おなじ時代に自らの輪郭を打ち破りつづけたもうひとりの人生がありました。小崎が新島に学んだ生徒のひとりであったとすれば、このひとは新島の妻となった女性です。今日は、先ほども触れました2013年のNHK大河ドラマ「八重の桜」に描かれた新島八重というひとの生涯を輪郭打破という視点からふり返ってみたいとおもいます。

先ほどは、「ご覧になった方、ご記憶の方もおられるとおもいます」と申しましたが、実際にはどれくらいの方がこのドラマのことを憶えておられるでしょうか。この教室のみなさんは中学生ぐらいの頃のことになるでしょうか。ただ、幸いなことに私の周りにはあのドラマをよく憶えていますという学生さんたちが結構いらっしゃるのです。まだみなさんの年代ならばあのドラマのお話をしても大丈夫かなとおもって、お話しいたします。

綾瀬はるかさんが演じたヒロイン新島八重、言うまでもなく新島襄夫人ですが、ドラマは、戊辰戦争を戦って壊滅状況に追い込まれていく会津藩の悲劇ともいべき歴史を背景に、藩の砲術師範の家に育った八重、旧姓は山本でありましたが、山本八重の少女時代を描くことから始めていました。

会津時代の八重は、少なくともドラマの上ではのこになりますが、「ならぬことはならぬものです」という言葉が口癖でした。八重が育った会津藩では、日新館と呼ばれる藩校に入校する前の6歳～10歳ぐらいまでの男の子たちが、おなじ町内に住む10人前後で集まりをつくり、遊びながら、お互いに毎日の生活ぶりを点検し合う習慣があったそうです。その集まりは「什（じゅう）」と呼ばれ、そこでの教訓、たとえば、

一、嘘言（うそ）を言うことはなりませぬ

一、卑怯な振舞をしてはなりませぬ

一、弱者をいぢめてはなりませぬ

というような道徳的な教えですが、これは「什の教え」と呼ばれ、子どもたちはいつもこうした教えを口にしていたようです。男勝りに育った八重もまた、男の子たちに混じって「什の教え」を語っていました。そして、この「什の教え」は最後に「ならぬことはならぬものです」と、その教えをまとめているのです。

第一回のことでしたが、会津松平家の養子となって、はじめてお国入りした松平容保（綾野剛さんが演じていました）に、この会津の教育システムを家老西郷頼母と年長家老の山川兵衛（こちらは山本圭さんでしたか）とが、一緒に説明する場面が描かれていました。史実をたどればこのとき、（西田敏行さんが演じる）西郷頼母は22歳であったはずでしたから（私も西田さんのファンではあるのですが）、ちょっと違和感を憶えた場面でした。まあ、それはともかくドラマでは、この「ならぬことはならぬものです」という会津藩の家訓が、幕末期には戊辰戦争において、まるで八重の生涯のテーマであることを暗示するように、この言葉は何度も彼女の口にもぼるのです。

私が不思議におもいましたのは、「ならぬことはならぬものです」という精神を生きようとするヒロインが、少なくともドラマでは、その精神のゆえに、過去の自分にかかわらず、そのときに直面した状況や新しい時代にふさわしい生き方を求めつづける近代型の女性のさがけとして、むしろ、その柔軟な生き方を強調するように描かれているという点にありました。

会津では幕末のジャンヌダルクと呼ばれ、会津戦争後は一転して、京都でキリスト教主義の大学を創ろうとした夫新島襄の協力者として活躍いたします。そして、夫の亡き後は、その悲しみも癒えなかったであろう、わずか3カ月後のことでした。誕生間もない日本赤十字社の篤志看護婦として日清戦争、日露戦争の時代に献身いたしました。さらに晩年になりまして、裏千家の茶道に生き甲斐を見出したということも伝えられています。

若い日に彼女と巡りあい、結婚を決意した新島はアメリカの恩人に書いた手紙のなかで、「彼女は生き方がハンサムなのです（She is not handsome, but she is a person who does handsome.）」（1875. 11. 23, Ms. Hardy宛より抜粋）と紹介したことを、2009年4月にNHKが「歴史秘話ヒストリア」という番組で取り上げてから「ハンサムウーマン」という形容がよく知られるようになりました。

実際の新島八重というひとが、どのような気持ちを抱えながら波瀾万丈の人生を生きたのか、そのほんとうのことは知る由もありません。しかし、名脚本家である山本むつみさんが描いたドラマの新島八重という女性は、「ならぬことはならぬものです」という会津人の精神を生涯にわたって貫き通すために、自分の立場や考えにむしろ固執しないで生きようとしているように、少なくとも私にはおもえてならないのです。

19世紀後半のイタリア統一運動のさなか、没落する貴族社会を通して時代のうねりに巻き込まれていく個人の心のありようを見事に描いた、ルキノ・ヴィスコンティ監督の「山猫」という有名な映画のなかで、アラン・ドロンの演じた主人公のひとり、*「変わらずに生きてゆくためには、自分が変わらねばならない」という印象深い台詞を語っています。変わらずに生きようとするれば、変わる勇気が必要なのかもしれません。*

新島の最も身近な女性、新島八重という女性もまた輪郭打破の人生を生き抜いたのかもしれない。

キャンパスの香り

ところで、もう10年ほど以前のことになるでしょうか。研究会や学会などで親しくご指導をいただいていた京都女子大学の佐々木恵精という先生が書かれた『香りに染まりて』（2008年 探求社）というご本を送っていただいたことがありました。浄土真宗の僧職にもおありになり、またインド哲学や仏教学の研究者でもいらした先生が、ご退職の記念にそれまで書き留められたエッセイをまとめたものでした。研究と教育と信仰において、誠実に取り組んでこられた先生のご性格が読み取れる書物でありました。佐々木先生はそこにこんなことを書いておられたのです。

「大学のキャンパスは不思議にその色合いや香りが異なるように感じられる。それは、その大学の創立以来の多くの先輩たちによって長年にわたって育まれ、培われてきたものがその

大学の特色となり、大学のおだやかな『香り』となっているのであろう。（・・・）筆者が育てられた京都女子大学においても、そのおだやかな香りがあるのである」。

「キャンパスの香り」。印象深い言葉です。同志社の今出川と京田辺のキャンパスはどうでしょうか。どんな香りがするのでしょうか。

私はここで、教師であった佐々木先生が、「筆者が育てられた京都女子大学」と書いておられたことに心動かされる思いをいたしました。先生の目には、若い学生たちのことが対等であるか、あるいは先生を育ててくれる教師のように意識しておられたのではないかとおもえたからです。

以前にやはり同志社スピリット・ウィークにお招きいただいて、今出川キャンパスでお話をいたしましたとき（２００８年11月6日）に、私は新島が亡くなった直後に同志社女学校に学んだ甲斐和里子さんという方のご紹介をさせていただきました。甲斐和里さんは京都女子大学の創立者のひとりでした。私は、佐々木先生が長年働きになり、自らがこのキャンパスで育てられたと述懐された京都女子大学には、同志社の女子教育の香りもまた漂っていたのではないかと想像して見るのです。

新島のキャンパスは

そういう意味では、キャンパスは不思議な場所だと言わなければなりません。みなさんには、同志社大学でさまざまな友人たち、先輩や後輩たち、あるいは、生涯を決定するような影響を受けるような先生との出会いがあるかもしれません。新島は、そんな同志社のキャンパスの理想を深い山懐に囲まれた大きな池に喩えたことがありました。やはり先ほどご紹介した横田という学生への手紙ですが、今度はその死の３週間ほど前に療養地から書き送ったものです。そこに新島は「我が校をして深山大沢（だいたく）のごとくになし、小魚も生長せしめ、大魚も自在に発育せしめ、小魚大魚、各（おのおの）その分に応じ、その身を世に犠牲となし、この美しき日本を早晚、改良して、主の御国（みくに）、すなわち黄金時代に至らしめん事は、小生の日夜、熱祈して止まざる所なり」（「94 横田安止宛 一八八九（明治22）年12月30日」『新島襄の手紙』316～317）

と書いています。同志社は、山懐の静寂に包まれた大きな池のようであって欲しいというのです。そこでは、小さな魚も大きな魚ものびのびと育ち、ともにそれぞれの能力に応じてこの社会のために尽くして、神の国の理想を実現して欲しいという意味かとおもいます。ここでは、新島が「小魚大魚、各その分に応じ」と書いていることに注目しておきたいとおもうのです。同志社に学ぶ若者が小玩具の規格品のようにになってしまうことを警戒した新島は、今度は小魚も大魚もそれぞれ自由に泳ぎ回り、それぞれの成長を遂げることができるような学校にしたいと願ったのでした。

愛の拡がり

新島は、理想とするキャンパスを大きな池に喩えました。新島は小魚大魚が自在に発育するためには何が必要だと考えていたのでしょうか。

晩年近くになって、いまから１３６年前のちょうど今日、おなじ日のことでしたが、新島が仙台の教会で行った有名な説教があります。

１８８６年５月30日、押川方義牧師が務める仙台教会（現日本キリスト教団東一番丁教会）で行なった説教の冒頭、新島は、

「『耶穌（ヤソ）教は何ぞ』と人、問われたれば、答えて曰（い）わん、『愛（もつ）てこれを貫く』』と言います。もし、キリスト教とは何ですか、と尋ねられたならば、私は「愛を貫くことです」と答えるでしょう、というのです。そして新島は「キリストの愛は、広く、深く、高く、この愛を以てこの世に來られ、この愛を以て神の道を説かれ、この愛を以て吾人（ごじん）を救わんがため、荊（いばら）の冠を甘んじ、十字架に磔（はりつけ）せられ、又、この愛を以て吾人を引き、この愛を以て今も尚、吾人の心に働く」とつづけています。（同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波書店 ２０１０年 １７７～１７８頁）。

新約聖書・エフェソの信徒への手紙３章18～19節には、「また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように」とあります。神の満ちあふれる豊かさとは、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さという具体的な指標の中で実感できる、実感して欲しいというのです。愛は、抽象的な観念や理想ではなく、きわめて具体的に計測できるような広さも長さも高さも深さも伴っています。

仙台での説教の中で、イエス・キリストのこの具体的な愛が私を変えましたと新島は告白したのでした。それが「この愛を以て吾人を引き、この愛を以て今も尚、吾人の心に働く」という新島の言葉の中に示されています。新島は、イエス・キリストの具体的な愛の広さ、長さ、高さ、深さを経験することで、自分を、そして、その生き方を変えたと述懐しているのです。

新島はどこにいたのか

先日、私はある授業で、函館から上海、香港、ベトナムやフィリピンを経由してほぼ１年の時間をかけてアメリカのボストンに到着した新島は、アジアの人びとのことをどのように理解し、どのように受けとめていたのでしょうか、という質問をいただきました。質問された学生さんはとても重要な視点に気づいておられたとおもいます。

新島は、函館から密出航をしたときにはセイボリー船長のベルリン号に匿われて、まずは上海に向かいました。ところが、ベルリン号はそこから長崎に戻ることにになっていたために、船長は新島の身を案じて、ワイルド・ローヴァー号という船のテイラー船長に新島を託したのでした。そこから新島はほぼ１年の航海を終えて、ボストンに入港することになります。アメリカまで１年を要したのは、この船が貨物船であったからです。アジア各地を行きつ戻りつを繰り返しながら、貨物の積み卸しを繰り返してインド洋、そして南アフリカの喜望峰を経由して、ようやくアメリカ東海岸に到達したのでした。

この間に新島が海外の諸事情についてどのように見聞し、どのような印象をもったのかについては、この時のいわゆる『航海日誌』に書き留めています。現在、岩波文庫版の『新島襄自伝』に「１８６４—６５年 函館から上海、ボストンへ」として収録されていますから、簡単に読むことができます。その一部を引用してみましょう。１８６５年４月25日にジャワ島付近に近づいた時の感想です。そこに新島は「この地の人物、色赤黒にして、柴棍（サイゴン・現ホーチミン）、マニラ等の同種なり。且つ齒を黒く染め、頭に色布を巻き纏（まと）い、見苦しき風俗なり」（岩波書店 ２０１３年 １２３頁（ ）は講演者）と書いています。今日の私たちの感覚から見ますとすこし差別的な印象を拭きません。

以前に同志社大学で教鞭を執られ、著名な哲学者でもあった鶴見俊輔さんはこの点について興味深い指摘をしておられます。鶴見さんは、おなじ頃、１８６０年に幕府使節の一員としてアメリカに渡った仙台藩士玉虫左太夫というひとが、復路、アジアを経由したときに書き残した日記を引いて、新島との決定的な違いを指摘しておられるのです。

玉虫はアヘン戦争以降、英国の蹂躞や支配によって疲弊する中国の人びとを見て、「傍観切齒（ぼうかんせつし）にたえず」と書いています。つまり、日本人として傍観して歯ざしりをするだけでいいのだろうか、というのです。鶴見さんは、玉虫のこの共感的な気持ちに注意しておられるのです。一方、新島はといえますと、鶴見さんを引用すれば、「新島には、植民地とされたアジア諸民族の苦しみを自分のものとして感じる事が、できない。それは、新島が、日本の国家の利益にだけ心をしばられていたことから、来ているのだろう。日本国家の利益を中心にして考える時、新島にとって、アジアが完全におこちてしまい、欧米諸国は、あこがれとおそれとの二重の興味の対象として、彼の視野を占領した」（鶴見俊輔「新島襄一大洋上の思索」和田洋一編『同志社の思想家たち』（上）同志社大学生協出版部 １９６５年 17頁）ということになります。新島はアジアを見ていなかったのではない。その理由は、新島が日本のごときか考えていなかったのも、欧米に近づきたいという気持ちと、他のアジアの国々ようになってはいけないという二つの気持ちで一杯だった、というのです。若い新島にかなり批判的です。

この鶴見さんの指摘が的を射たものであるとすれば、おなじアジアの人びとの苦しみが見えていなかった新島が、いったいどのようにして、愛を以て貫く世界観を獲得していったのかを考えておかなければなりません。新島は、大きく自分の人生を造り変えていったのでした。その意味で新島こそ、小崎に先立って「輪郭打破」を実践したひとであった、あるいは、小崎や八重夫人とおなじように、輪郭打破の人生を生きたひとであったと考えることができるのではないかとおもいます。

新島記念講堂のステンドグラス

ところでみなさんは、隣の同志社女子大学のキャンパスに新島記念講堂があることをご存知だとおもいます。こちらの同志社大学京田辺キャンパスからはとてもよく目立ちます。女子大学側から見るとこちらのキャンパスから見ると、とても大きく見えるような気がいたします。新島記念講堂は、女子大学のキャンパスに建てられていますが、京田辺にキャンパスを展開している同志社大学、同志社国際中学校・高等学校、そして同志社女子大学共通の施設として建設されています。ですから、三つの学校のキャンパスが道路を挟んで交わるような場所に建てられているのです。

その新島記念講堂の女子大学側の入り口には、以前から６面のステンドグラスが設置されていましたが、２０１５年の夏に講堂本体にも北側と南側の壁にそれぞれ、縦に３列、横に５列、全部で30面のステンドグラスが新設されました。

ぜひ、一度、新島記念講堂に足を運んでご覧になっていただければとおもいます。ただ隣のキャンパスとはいえ、なかなかその機会はないかもしれません。そこで、今日はそのステンドグラスについてご紹介します。

新島記念講堂のステンドグラスは、縦方向の窓は連続していますが、横方向には列と列の間の壁が窓の中とおなじくらいにあります。同志社女子大学の講師であり、オルガニストでいらっしゃる高橋聖子先生は、このステンドグラスが完成した直後に、「私が思うに南側から射す光の色が客席に美しく映え、会堂の雰囲気がいよりの柔らくなったように感じられます。」（高橋聖子「ステンドグラスとオルガン音楽」『KYOTO MUSICIAN 京都音楽家クラブ』第680号 Dec. 2015）と書いておられます。私は、このステンドグラスを設置するときに、コンセプトや色合いなどについてすこしですが、お手伝いをさせていただいたことがありました。ステンドグラスが設置される以前と以後を知る者にとって、この言葉は、的確にステンドグラス設置後の新島記念講堂の空気を伝えています。

新島記念講堂のステンドグラスのデザインは、一般に連想し易い聖書物語やキリスト教史上の偉人、あるいはそれらにまつわるアイテムをモチーフにデザインされてはいません。伝統的なステンドグラスのイメージを打ち破っていて、とても斬新です。ご覧いただくと、和風の印象をもたれるかもしれません。「海」と「光」を基本モチーフとしてデザインされていますので、全体として青色の印象が強く残ります。しかし、よく見ていただきますと、すべてがおなじ青い色ではありません。入り口からステージに向かって縦方向に連続している窓の最初の列は、青というよりもむしろ漆黒の闇とも言うべきダークな色で、どう見ても青には見えません。天地創造のときの暗闇でもあります。しかし隣の列からは徐々に光と青みが増して、中央、すなわち３列目あたりでは鮮やかなライトブルーに変わります。そして最後、ステージに一番近い列では同志社のスクールカラーであるロイヤルパープル（古代紫）に変わっ

ているのです。それぞれの列には空があり、海の水があらわれています。そこに光が差し込み、波と水しびきとが幾重にも描かれています。波や水しびきによって風を感じることもできます。風は、本来、聖書では聖霊という言葉とおなじ意味の言葉でした。聖霊は神の働きであると言われています。

新島の海—海の思想—

私は、もしこのステンドグラスに名前をつけるとしたら、個人的なアイディアでしかありませんが、「新島の海」「海の思想」と名づけたいとおもっています。それは、先ほどご紹介した鶴見俊輔さんが、アジアの人びとに対して無関心であり、またときに差別や侮蔑を含む感情を有していた新島が大きな変容を遂げたのもた、アメリカまでの大海原での体験であったと考えておられることをヒントにしています。鶴見さんは、若い日の新島のこの思想的転換を「海の思想」と呼ばれたことがあったからです。

こちらのキャンパスにある京田辺会堂の言館と光館の間にも「新島襄の海」と呼ばれるプールが配置されています。偶然ですが、同志社大学では、国禁を犯して海を渡った新島にちなんで、国際主義を象徴した施設として位置づけておられると伺っています。

いずれにしても新島は、1865年7月20日、函館から密出国してほぼ1年の長い航海ののちにボストンに到着します。鶴見さんはインド洋からアフリカの喜望峰をまわり、大西洋をこえてたどり着いた1年余りの航海が若い日の新島をすっかりそれまでとは別の人格につくり変えたのだとおっしゃるのです。

再び、鶴見さんの言葉を引用しましょう。「〈人は〉考える場所によって、考え方の性格がかわる。陸の思想と海の思想とは、しぜんにちがってくるものだ。海の上において、海から陸を見ること一年のあいだに、新島にとって、陸地の一部分である日本のそのまた一部分である一つの藩〈安中藩〉の風習が、遠いささやかなものに感じられてきた。海思想は、青一色をながめてくらしているために、また天を見てくらしているために、陸の思想よりも、はるかに普遍的である。こうした毎日の考えの積みかさなりの上に、聖書の言葉が急に新しい意味をもって彼の心の中に生きて来た」（前掲書『同志社の思想家たち』（上）18頁〈 〉内は講演者）。これが鶴見さんの言葉です。鶴見さんが最後に「聖書の言葉がにわかには新しい意味をもち始めた」という意味のことを書いておられます。その新しい意味をもって新島の心に迫った聖書の言葉とは、新約聖書・ヨハネによる福音書3章16節の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という言葉でした。新島が上海まで大切にもちつづけた武士の魂とも言える大小2本の刀に換えて手に入れた漢文訳聖書では、「蓋神愛世甚至以其独生之子賜之俾凡信之者免沈淪而得永生」（けだし神は世を愛することはなほだしく、そのひとりごをもって、これをたまたうにいたる。およそ信ずるものをして沈淪をまぬかれ、永生を得しめんためなり）と書かれています。新島にとって聖書に書かれた神は、その大切な独り子イエス・キリストをこの世に贈られるほど、この世界を愛された愛の神であったと理解されていたということになるでしょうか。

再び、鶴見さんはさらに、「この〈聖書の〉一行が新島の心にしみわたってゆくにつれて、〈中略＝故郷や家族への愛着を離れて〉永遠にゆるがない普遍的な価値の体系の中に、世界の一つ一つのできごとが位置づけられ、日本もまたその中の一つの部分として見えるようになった。海をへだてて日本を考えるという条件そのものが（中略）函館出発までは考えることのできなかった別の見方に新島をつれた」（前掲書『同志社の思想家たち』（上）21～22頁〈 〉内は講演者）。

あなたはどこにいるのか

そう考えてみますと、新島記念講堂のステンドグラス最終列の紫は同志社で学びみなさんが、どうか、紫という同志社カラーに染まってくださいというメッセージであると受けとめる必要はありません。新島が1年をかけて海を隔てた故国日本を新しい見方によって捉え直すことができたように、みなさんは同志社で学ぶことでどんな新しい世界を見つつけようとしていますか、という新しい問いかけでもあるのです。

旧約聖書・創世記3章9節には、エデンの園で禁じられた知恵の木の実を食べたことの発覚を怖れて身を隠すアダムに神が「どこにいるのか」と尋ねています。聖書の言葉をそのまま読みますと「主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか?』」となります。神はさ迷いと後悔の中に静かに身を沈め、隠れてしまおうとするアダムを呼びました。その声は「どこにいるのか」。正確には「あなたはどこにいるのか」という呼びかけです。

「どこにいるのか」というのは、単純に場所を尋ねているものではありません。原文のヘブライ語聖書では、いったいどのような理由があつてあなたはいまそんなところに身を隠しているのか、という根源的な問いを含んだ疑問詞が使われています。旧約聖書にはいくつかおなじ疑問詞が使われていますが、ひとつだけ参考にしておきたいとおもいます。たとえば、「哀歌」1章1節には「なにゆえ、独りで座っているのか」という言葉があります。この「なにゆえ～なのか」こそ、アダムに向けられた「どこにいるのか」とおなじ言葉でした。

神は、アダムに単にいまいる場所を尋ねているわけではありません。そうではなくて、アダムはどうしてそんなところに身を隠さざるを得なくなったのか、ときわめて本質的な問題を尋ねているのです。

新島は、1年間の大海原での経験によって、陸の思想ではなく海思想を獲得しました。しかし、海思想は新島に繰りかえして「あなたはどこにいるのか」と彼の人生の本質を問いつづけたのでした。

このように考えてまいりますと、新島の偶像不羈にしても、小崎の輪郭打破にしても、そして八重夫人の「ならぬものはなりません」を貫くために、柔軟に生き抜いた人生にしても、彼らはおなじように本質的な問いの前に立っていたのではないか、というこれも私の仮説ではありますが、申し上げておきたいとおもうのです。

鶴見俊輔さんは、新島記念講堂のステンドグラスが完成する直前、ちょうどステンドグラスの工事が始まった頃、2015年7月20日に93歳で天国の大海原へと旅立ってゆかれました。それは、奇しくも150年前に新島襄がボストンに到着したのとおなじ日のことでした。

今年の同志社スピリット・ウィークを迎えて、私たちもまたこの恵まれた環境の中でキャンパスでの研鑽を通して、人生の根源的な問いかけを知り、自らの輪郭を打破しつづける勇氣と希望をもって歩みたいと願ってやみません。